

紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目 次

序

‘廃棄’を考える－貝塚出土資料の検討にあたっての試論－〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動－セタシジミの成長速度と年齢構成－〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法について－近畿地方の場合－〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけて－その方法と課題－〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器－今川東遺跡出土石器を中心に－〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマド－古代の暖房施設試論－〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3－野洲・栗太をフィールドに－〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 －古墳時代システム論への墓制的アプローチ－〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質－古墳時代システム論への予察－〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 －滋賀県の事例を中心に－〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿－鴨田遺跡出土の巡礼札より－〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏について－近江古代豪族ノート5－〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

－日本古代史研究ノートあるいは覚書その2－〔芝池信幸〕	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕	243
新聞報道にみる文化財保護25年－新聞記事データベースの作成と利用－〔中川正人〕	252

栗太・野洲郡のまとめ

以上のように大きな4つのテーマに分け、各論考によって今回の栗太野洲という地域の研究を行ってきたわけであるが、それらをもとにこの栗太・野洲という地域を地域相及び特殊性という二つの枠に括り、代表的な遺跡をもとに時代を追ってまとめていきたい。なお、栗太・野洲は、近江の中でも極めてダイナミックな展開を見せている地域であることはすでに理解されているところであると思われる。そのため今回の各論考の中では触れられなかった点も幾つかあるが、そのような点もこのまとめの中に入れていきたい。

栗太・野洲郡の地域相

弥生時代中・後期

この地域における弥生時代中・後期の代表的な遺跡として、二ノ畦・横枕遺跡、下ノ郷遺跡、播磨田東遺跡が挙げられ、それらは直径300m以上の範囲を持つ環濠集落である。さらに、これらの環濠集落に後出する伊勢・下鉤遺跡は大型の掘立柱建物を核としその周辺にも掘立柱建物群を配しており、それらは溝・柵によって方形に区画された集落であると考えられ、現状では近江全体の中においては比較的明瞭に集落様相を知ることのできるものである。

なお、この地域の手工業としては、烏丸崎遺跡や宮前遺跡、播磨田東遺跡で行なわれていた玉造りを挙げるができる。玉造り自体は近江全域で認められるとはいうものの、この地域における密度は相対的に高いと捉えられる。

以上のような集落に対して、代表的な墓制を示す遺跡は、酒寺遺跡、吉身西遺跡、益須寺遺跡、富波遺跡を挙げるができる。酒寺遺跡・吉身西遺跡においては、方形周溝墓が2基ずつ並列した形で、中央の周溝を基軸として累々と列をなして認められるという特徴を持っている。なお、このような方形周溝墓に係る祭祀遺物として、湯ノ部遺跡や烏丸崎遺跡で検出されている木偶の存在も挙げるができる。

定型化した古墳の前段階（プレ）として益須寺遺跡・富波遺跡などにおいては、前方後方形周溝墓の存在が認められている。この前方後方形周溝墓は、この地域での検出数及び分布密度の高さは注目されるものである。

また、この地域の弥生時代中期以降において代表的な遺物としては、大岩山で発見された日本最大のものを含む多量の銅鐸群の存在を忘れることはできないであろう。

古墳時代前期

古墳時代前期におけるこの地域を代表する集落は、下長遺跡・高野遺跡群を挙げるができる。下長遺跡は、溝などによって方形に区画された中に大型の掘立柱建物が存在し、野洲川下流域に

においては傑出した内容を持つ集落遺跡であり、この地域における核となる集落であると考えられている。また高野遺跡群は、畿内政権との関わりを想定させる特殊な手工業である碧玉製腕飾類の工房を伴った集落である。なお未製品及び滑石製の鍬形石を副葬していた北谷11号墳とこれらの集落には何等かの関係があるものと考えられている。

このような集落に対して、この地域を代表する墓制は、大岩山古墳群およびその周辺の古墳と安養寺古墳群を挙げられる。大岩山古墳群およびその周辺の古墳においては、第2番山林古墳、大岩山古墳、古富波古墳、亀塚古墳、岡山古墳での出土事例から、多くの三角縁神獣鏡を円墳に副葬するという点を特徴として認めることができる。それにたいして安養寺古墳群においては、山の上古墳、毛刈古墳、下味古墳での出土事例から、石製腕飾類を円墳に副葬するという点を特徴として認めることができる。この両者は、副葬品における本来のセットとなるべきものを分有しているという点を特徴として指摘できる。

古墳時代中期

古墳時代中期におけるこの地域を代表する集落は、高野遺跡群（高野遺跡・辻遺跡・岩畑遺跡）、播磨田東遺跡、横江遺跡、下長遺跡を挙げることができる。

下長遺跡、高野遺跡群、横江遺跡においては、製塩土器や朝鮮系軟質土器など多くの搬入遺物の出土事例が知られている。このことは、これらの遺跡が物流の拠点となっていたことを示すものであろう。

また高野遺跡群においては鉄器生産、播磨田東遺跡等においては滑石製品の製作を行うなど、多彩な手工業の展開も認めることができる。なおこの時期には、須恵器生産と親縁性があるとされるタタキ技法を用いた埴輪が、滋賀県においては野洲川下流域である下長遺跡、五之里遺跡においてのみ確認されていることも注目すべき事実である。

このような集落に対して、この時期を代表する墓制は、新開1号墳・2号墳、地山1号墳・椿山古墳・大塚山古墳を挙げることができる。

新開1号墳では、先進的な様相を示す甲冑や初期馬具に代表されるような豊富な鉄器が副葬されている。また、新開2号墳では列島内では類例が少なく、大陸との関りや鉄器製作との関りが指摘される鉄挺が副葬されており、極めて優れた内容の副葬品を持っている。

また、地山1号墳に始まり椿山古墳・大塚山古墳にかけての首長墓系譜が帆立貝形古墳として出現する。これは、この時期の近江における首長墓の特徴ではあるが、野洲川下流域もその傾向に含まれていることを示していると捉えられる。

なお、この時期には、服部古墳群や南笠古墳群に認められるような古式小古墳群も形成されている。

古墳時代後期

古墳時代後期を代表する集落としては、伊勢・野尻遺跡や高野遺跡群を挙げることができる。

伊勢・野尻遺跡は、溝によって区画された豪族居館と考えられる遺構が検出されている。高野遺跡群は、これまでに挙げてきたように古墳時代を通じて認められる集落である。ただこの時期

における特徴としては、極めて高い率で鉄器を保有しており、その背景にある集団の性格を考えただけの場合には注目する集落としてあげることができるであろう。

このような集落に対して代表的な墓制を示す遺跡を挙げて見ると、大岩山・福林寺古墳群、夕日ヶ丘古墳群、桜・三上神社古墳群、部田・北谷古墳群、木部天神前・印岐支呂神社古墳群などをあげることができ古墳時代後期を特徴づける横穴式石室を内部主体とした古墳群が多く築かれている。

これらの古墳群は、それぞれに異なった性格を指摘できる。大岩山・福林寺古墳群は畿内政権との関わりのもとに地域支配者層とその直接支配者層のもの、夕日ヶ丘古墳群は須恵器生産との関係を想定できるもの、桜・三上神社古墳群は複数の集団を結合させた特殊な集団のもの、部田・北谷古墳群は水系及び集落群に対応したもの、木部天神前・印岐支呂神社古墳群は「港湾施設の管理」に関わるものといったように考えられており、古墳時代後期における葬制上の地域支配システムが存在していると捉えられる。

なお、このころになると鏡山古窯跡群における須恵器生産が最盛期を迎えている。鏡山古窯跡群は、県内最大規模の窯体数が確認されており、またその製品は県内各地に流通されたものであると考えられる。

7世紀

7世紀における代表的な集落は、東光寺遺跡、安城寺遺跡、益須寺遺跡、西河原森ノ内遺跡、花摘寺遺跡が挙げられる。

益須寺遺跡、花摘寺遺跡、西河原森ノ内遺跡はこの時期に認められる瓦出土遺跡であるが、これらには幾つかの性格のもとに理解されている。

古代寺院としての益須寺遺跡は、古代官道に沿って立地している。古代官道沿いに立地する古代寺院は、他に手原廃寺・福林寺遺跡が存在するが、これらは郡衙に近接して認められるという点において益須寺遺跡とは異なるとされ、「官衙ブロック」の一部として性格づけられる。

これに対して西河原森ノ内遺跡や花摘寺遺跡は、湖岸部に近い標高88mラインに位置する遺跡であり、その周辺においても幾つかの瓦出土遺跡を認められることから、この地を「港湾施設」として想定し小地域の中で政治的に経済的に優位に立つ地域であるという性格づけがなされる。

なお益須寺遺跡は、立地からその地域の再開発及び再構成をなすための拠点としての位置付けができる。また安城寺遺跡は、7世紀以降突如として出現する遺跡であり、地域の集落群の再構成（再編成）がなされたものであると捉えることができる。

また、西河原森ノ内遺跡周辺では多く木簡が出土しており、その中からは近江における湖岸部の集落間を結ぶ交通の中に、舟というものが一般的に使用されていたということを知ることができる資料が存在する。

また、石居廃寺の造営は、この頃の官道とも考えられる田原道の開発を行なう拠点として位置づけられるもので、宇治田原町所在の山瀧廃寺とともに道の整備に関係するものとして注目され

る。

このような集落及び寺院とは別に、この頃には瀬田丘陵において非原料立地型とされる源内峠遺跡などの製鉄遺跡群が認められる。これは、近江における多くの製鉄が南郷桜峠遺跡のように原料立地型であると言うことと比較すると特異な状況である。また瀬田丘陵における製鉄遺跡は、須恵器生産と密接な関係を持つことが多く、その背景には山林所有の問題も含めて考えることができる。

7世紀に入ると滋賀県内で須恵器の生産地が多く認められ、1郡に1ヶ所程度の生産地が出現する。それと対応するように鏡山古窯址群の窯体数が減少する。栗太郡では、御園古窯址群、瀬田丘陵古窯址群が7世紀から生産を開始するが、前者は岡遺跡を中心とする官衙ブロックに、後者は近江国庁を中心とする官衙ブロックに関連して成立したものと考えられる。

なお、この時期に代表的な墓制を示す遺跡としては、様々な形態の埋葬施設の存在を示す横尾山古墳群が挙げられ、被葬者群は瀬田丘陵生産遺跡群との関連が想定できる。

8世紀以降

この時期における代表的な集落としては、坊主東遺跡、矢倉口遺跡、岡田追分遺跡、大將軍遺跡の一群を挙げる事ができる。

これらの遺跡群は、官道に沿うように立地するものであり、総柱建物の検出数が相対的に多い地域である。その掘立柱建物は桁・梁比、柱間比ともに規格性の高い遺構を検出し、かつ、それらの建物の比率が他の集落遺跡と比べて高い点を、この遺跡群の特色として指摘することができる。なお、これらの遺跡群の近隣では古代官道の東海道と東山道が分岐しており、遺跡の性格は交通の要衝と無関係のものではないだろう。

このような集落とは別に、この時期には国家的な施設が多く出現するようになる。それは、近江国庁を中心としてその関連施設としての勢多駅家もしくは国司館などに堂の上・野畑・青江・中路・瀬田廃寺といった遺跡群が一体となって「官衙ブロック」を形成している。この点については栗太・野洲をはじめとする各郡衙においても駅家・寺院等の施設が近接して所在し、一種の「官衙ブロック」を形成していた可能性が高い。

また8世紀前半には、石居廃寺は地域の中でのその存在を積極的にアピールしないが、これは紫香楽宮及び恭仁京の造営に関わり交通体系の比重が移動した結果によるものと捉えられる。以後この石居廃寺は、平城遷都による交通体系の再転換にもかかわらず、南山城側における寺院の整備とは呼応しなかったといえる。

なお、8世紀代において勢多地域周辺には都城において主体的なものとしての所謂都城型土師器甕が近江の中で唯一分布する地域となる。この地域の特性の一つとしての国庁、保良宮の存在に関連してこの地にて出現したものと考えられる。なおこの土師の製作地として御倉遺跡が想定されている。また、野路小野山遺跡では同時期に6基以上の製鉄炉を並列させ、良質の鉄鉱石を搬入し鉄素材を量産したものと捉えられ、非原料立地型製鉄遺跡の典型的なものである。

墓制については、野郷原遺跡、青江遺跡において火葬墓が検出されており、横尾山古墳群でも

8世紀の墓が存在する可能性が指摘されている。

栗太・野洲郡の特異性

以上地域相を述べてきたわけであるが、その中から特異性として把握できるものをまとめてみたい。

弥生時代中・後期の時期においては、伊勢・下鈎遺跡での拠点集落の在り方・烏丸崎遺跡などを主とした密度高く認められる玉造り、益須寺遺跡や富波遺跡を代表的なものとして検出数の多い前方後方型周溝墓、大岩山において多量に埋納された銅鐸群、とそこには極めて多様な地域の特異性を認めることができる。

古墳時代前期においても、この地域においては、高野遺跡群での碧玉製腕飾類の製作や大岩山古墳群に見られた三角縁神獣鏡の分与などは、野洲川下流域が持つ弥生時代と同様に特異性を示すものである。

古墳時代中期になると高野遺跡群や下長遺跡、播磨田東遺跡などにおいて、製塩土器や朝鮮系軟質土器等の多くの搬入遺物の存在、鍛冶や玉造りなどの近江の中では特徴的な手工業を確保している。また墓制においては、新開1号墳・2号墳に認められるような甲冑及び初期馬具・鉄挺といった先進的な鉄器を保有している点などは、この地域が密接に「畿内政権」と関わり合いを持っていたということを示している。

古墳時代後期においては、高野遺跡群での鉄器保有率の高さから、その特異な集団の存在を想定できる。また鏡山古窯址群については、須恵器の生産・供給において近江の中で優位性を持っていたと捉えられるであろう。

7世紀以降では、岡遺跡・手原遺跡など注目すべき遺跡も存在するが、その内容は近江の他の地域においても展開していくことから、必ずしも近江の中での特異性とは指摘しがたい。

7世紀までの栗太・野洲の特異性は、具体的には野洲川下流域の動きそのものを指す。野洲川下流域は、近江の中で、列島の中で、建物・墓制・生産、及び畿内との関りの中でも傑出した存在であったといえる。しかし、7世紀を境にそういった側面は薄れ、近江の中でも一般的な在り方を示す一地域として埋没する。この段階を野洲川下流域の動向の中での最大の画期として捉えたい。

一方、栗太・野洲地域の中でそれまで目立たなかった勢多周辺という地域は、7世紀以降の非原料立地型製鉄遺跡の存在、8世紀の国庁及びその関連遺跡・勢多津・国分寺・保良宮・田上山作所の存在といった国家プロジェクトによって、近江のみならず日本列島の中でもその存在をクローズアップされて来る。また、道の整備に伴い東海道と東山道の分岐点に立地する遺跡群の出現も8世紀以降の出来事である。つまり、勢多周辺地域や分岐点に立地する遺跡群の動向の中で7～8世紀を最大の画期として捉えたい。

以上のように、弥生時代中期から8世紀までの時間幅で栗太・野洲という地域の動向を検討した。紙幅の関係もあって言葉足らずの点なども多くあったと思われるがその点については御容赦頂きたい。今回の共同研究では、勢多周辺地域や分岐点に立地する遺跡群の動向（画期）は野洲川下流域の動向（画期）と無関係ではなく、むしろ両者の動きは連動していたものと考えられる。両者にみられる画期は、列島が「倭」から「日本」へと展開していく過程の一つであったのだろう。

今回の共同研究を行なうにあたって、資料の実見や御教示など多くの方々にお世話になりました。深く感謝申し上げます。

お世話になった方々

青山 均	穴澤義功	雨森智美	稲垣正宏	岩崎 茂	大崎隆志	小熊秀明
角 健一	北野博司	北原 治	葛原秀雄	黒坂秀樹	小宮猛幸	小森俊寛
近藤 広	佐野静代	佐伯英樹	白井忠雄	鈴木康二	関川尚功	田島正和
田中久雄	谷口智樹	辻川哲郎	出越茂和	田路正幸	中井正幸	鍋田 勇
波部 健	平尾政幸	広瀬和雄	藤居 朗	別所健二	松浦俊和	松村 浩
三好美穂	山本孝行	(敬称略 50音順)				

編 集 後 記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年には当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀 要 第 9 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668